

労働者階級の実証的歴史分析の方法について ：エンゲルス『イギリス労働者階級の状態』 の方法の場合

MURAKUSHI, Nisaburo / 村串, 仁三郎

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

38

(号 / Number)

3・4

(開始ページ / Start Page)

313

(終了ページ / End Page)

347

(発行年 / Year)

1971-01-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008329>

労働者階級の実証的歴史分析の方法について

——エンゲルス『イギリス労働者階級の状態』の方法の場合——

村 串 仁 三 郎

は し が き

戸塚秀夫氏は、エンゲルスの古典的労作『イギリスにおける労働者階級の状態』（以下『状態』と略す）について論じた論文で、この労作が、イデオロギー的宣伝の書として重視され「科学的な文献としては十分な吟味をうけてきたとはいえない」とのべ、更にこれまで本書が「初期エンゲルスの思想形成過程の一資料」として「経過的な位置」しか与えられず、「産業革命をへたイギリス労働者階級を総括的に把握しようとした、科学的な認識の書」として研究されてこなかったと指摘している。確かにその通りである。ではどうしてそうした見地から研究されなかったのだろうか。私はその理由を二つあげたい。第一に、これまでマルクス主義に根強かった公式主義、教条主義的傾向が、労働者階級の科学的な実態分析を軽視していたために、労働者階級の実態分析の一つのモデルを示していると思われる本書に対して関心をもちなかった、ということである。第二に、なんといっても、初期エンゲルスの著作であるため、方法論的にも理論的にも未成熟さがあり、どうしても批判的な考察が要求されることから、

教条主義的傾向が強かった従来のマルクス主義者は、いきおい本書の検討そのものを回避してきた、ということである。

戸塚氏の論文は、そうした呪縛から解放されて、主として本書を「労働者調査の科学的文献」とみ、その「意義と限界」について検討したものであり、『状態』を労働者階級の状態論、自体の問題として論じた数少ない研究論文の一つである。

しかし戸塚氏の『状態』についての研究視角は、本書を「イギリス労働者階級の状態を総括的に把握しようとした科学的認識の書」であるとしながらも、『状態』の方法論を全面的に論じるのではなく、単に「労働者調査の科学的文献」(「意義と限界」)としての考察に限定している。もとよりこうした研究視角はそれ自体正しいのであるが、『状態』が内包している問題を全面的に明らかにするという見地からはまだ一面的である、といわなければならない。小論は、『状態』の方法論を問題にすることによって、『状態』のもつ基本的、本質的な問題を検討しようとするものである。

但し小論は枚数制限の都合上、前掲拙稿ではあまりにも簡単にしか論じられなかった『状態』の方法について詳説するという形式をとらざるをえなかった。従って勝手ながら読者はあらかじめ拙稿を参照のうえ、小論を読まれることを希望しておきたい。

(1) 戸塚「エンゲルス労働者調査の意義と限界——『イギリスにおける労働者階級の状態』をめぐって——」、『経済評論』、一九六八年四月号、一四八頁。

(2) 同上、一四九頁。

(3) 拙稿「エンゲルスの『労働者階級の状態』論」、雑誌『月刊社会党』一九六七年七月、八月、一〇月、十一月、一月号に連載(松尾均編のところ印刷のミスで編が脱落している)。

一、『状態』の研究対象と課題

① 『状態』の研究対象

エンゲルスは、イギリスの労働者にあてた本書の「献辞」で、「この著作のなかで、私は諸君の生活条件、諸君の苦悩と闘争、諸君の希望と将来の見通しの忠実な画像を、わがドイツの同胞にたいしてえがいてみせようと試みた⁽¹⁾」と述べている。ではイギリスの労働者階級の「生活条件」「苦悩と闘争」「希望と将来の見通し」の「画像」とは、具体的に何であろうか。我々はそれを本書の目次と本書の概要をみることによっておおよそ知ることができる。本書の目次は次の如くである。

「イギリスの労働者階級に寄せる（「献辞」）

序 文

序 説

工業プロレタリアート

大都市

競 争

アイルランド人の移住

諸 結果

個々の労働部門——狭義の工場労働者——

その他の労働部門

労働運動

鉱山プロレタリアート

農業プロレタリアート

プロレタリアートにたいするブルジョアジーの態度⁽²⁾

以上の目次だけでは研究対象は明らかにならないので、叙述内容をもう少し明確にしてみよう（その際ナンバーは篇別を明確にするために筆者がつけた）。

一、「序説」では、イギリス労働者階級の前史及び発生史、イギリス工業の発展史、労資両階級の政治的対立関係が一般的に記述されている。

二、「工業プロレタリアート」は「大都市」から「労働運動」の章に至る工業プロレタリアートの記述の前文である。従って「工業プロレタリアート」の記述全体は第一篇の地位に相当する。

そしてこの篇は内容的にはまず二つに大別され、前者は四つに区分される。

I 労働者階級の経済的状态の記述

(1) 「大都市」の章では、都市労働者の住衣食の消費生活の状态が記述されている。

(2) (A) 「競争」の章では、

個々の労働者の競争、失業予備軍の大規模な競争、予備軍自体の状态が記述されている。

(B) 「アイルランド人の移住」の章は、前章の続きで、失業予備軍の特殊形態としてのアイルランド人の移住の实態が記述されている。

(3) 「諸結果」の章は、以上の生活に規定される労働者の肉体的、精神的状態が記述されている。

(4) (A) 「個々の労働部門」の章では主として労働過程における労働者の状態が記述されている。

(B) 「その他の労働部門」の章は前章の続きをなす。

II 「労働運動」の章は、前章までが労働者階級の経済的諸条件の記述であるのにたいし、労働者の政治的側面の記述である。すなわち、労働者の資本家に対する反抗の諸形態が記述されている。尚、最後の章の「プロレタリアートにたいするブルジョアジーの態度」の本文がここにくれば、労働者階級の上部構造の全面的分析としてより整合的となる。

三、「鉱山プロレタリアート」の章は、前章までの「工業プロレタリアート」の篇に対応する篇であり、記述方法は、工業プロレタリアートの記述内容を圧縮したかたちでのべるといふものである。

四、「農業プロレタリアート」は「鉱山プロ」の場合と同様である。

五、最後の「プロレタリアートに対するブルジョアジーの態度」の章は、エンゲルスの言葉ではブルジョア「階級」の思想と行動との様式」が記述されているが、内容的には、政治的面の記述であり、「労働運動」と併せて把えるのがよいであろう。但し、この章の最後の小文は全篇の結論として、革命の見通しを与えているので独自の篇として把えてもよいと思う。

以上によつて、エンゲルスが『状態』であつた研究対象はほぼ明らかになつたであろう。今これをもう一度明確に特徴づけるならば、次の如きことができる。

一、『状態』は、イギリスにおける労働者階級の現実的具体的歴史的な事実関係それ自体を研究対象としている、ということである。すなわち、イギリスという特定の国の、一九世紀前半という一定の時期の労働者階級の状態を問題にしているのである。そしてそれは、エンゲルスが強調しているように「研究対象について、たんなる抽象的

知識以上のもの⁽³⁾つまり「事実」⁽⁴⁾そのものの分析であった。この点理論経済学などの研究対象と根本的に異なる。『資本論』では、「問題なのは資本制的生産の諸々の自然法則」「そのものであり、頑強に必然性をもって作用して自己を貫徹しつつあるこれらの傾向」、あるいはその「理論的展開」⁽⁵⁾であった。ところが『状態』は、あくまで、一定の国の一定の時期の労働者階級の現実的で、具体的な歴史的事実関係そのものが問題になっているのである。

二、『状態』の研究対象は「対象が包括的」⁽⁶⁾であり、従って労働者階級を全面的に研究しているということである。すなわち労働者階級の経済的側面だけでなく政治的側面をも、又前者については労働力商品及びその人格的担手の再生産過程（生産、流通、消費）を全面的に、後者については、労働者の運動の基本形態、発展段階を全面的に扱っている。又エンゲルスが「すべての労働者を扱った」⁽⁷⁾といっているように、当時の基本的な産業部門の労働者をすべてあつかっている。こうした『状態』の「包括的」な記述は、『資本論』においてみられるような個々の理論の「例証」⁽⁸⁾として、例えば『労働日』の理論展開の「例証」として記述されているイギリス労働者の「標準労働日のための闘争」という断片的な記述と異なる。『資本論』におけるイギリス労働者階級の断片的状態は、あくまで個々の理論の「例証」であり、各断片的「状態」はそれ自体相互に体系的な関連をもつものではない。ところが、本書の『状態』の対象は一つの体系的関連をもった「包括的」な記述なのである。

以上のように、『状態』の研究対象は、具体的歴史的なしかも総合的全面的な労働者階級そのものであり、その限りで理論的科学の研究対象と根本的に異なる。後者の場合はあくまで具体的な労働者の状態は、カテゴリー抽出の手段であり、理論を例証する素材なのである。

(1) マル・エン全集（大月版以下同じ）第二卷、二二五頁。

(2) 同上、目次参照。

- (3) 同上、二二五頁。
- (4) 同上、二二八頁。
- (5) 『資本論』（青木書店版以下同じ）、七一頁。
- (6) マル・エン全集第二巻、二二八頁。
- (7) 同上、二二八頁。
- (8) エンゲルスは「『経済学批判』について」において、マルクスの『経済学批判』の方法を批評して、「理論的展開」が「純粹に抽象的な領域」にとどまらないように歴史の説明を「例証」として「非常に多種多様に挿入されている」といっている『経済学批判』（岩波文庫版）、二六八頁。

② 『状態』の研究課題

エンゲルスは、右にみた研究対象を通じて何を研究の課題あるいは目的としたのであろうか。すでに引用したように、エンゲルスはイギリス労働者階級の状態を「わがドイツの同胞にたいしてえがいてみせようと試みた」というのだが、その意図は何であつたのだろうか。

エンゲルスは、「序文」で「労働者階級の状態は、現代のあらゆる社会運動の実際の土台であり、出発点である⁽¹⁾」とのべ、労働者階級の状態を問題にする意義を検討している。彼は、「労働者階級の状態」は、「われわれのあいだに現存する社会的困窮の最高の、もつとも露骨な頂点」であるといい、「この労働者階級の状態から、フランスとドイツの労働者の共産主義は直接に生みだされ、フリーエ主義とイギリスの社会主義およびドイツの教養あるブルジョアジーの共産主義は、間接的に生みだされた⁽²⁾」と指摘している。こうした唯物論的見地に立つてエンゲルスは、「一方では社会主義の理論に、他方ではこの理論の正当性にかんする判断に、不動の基礎をあたえるために、……プロレタリアの状態を知ることがどうしても必要なのである⁽³⁾」と主張している。ここから明らかなように、

エンゲルスは、『状態』において、彼の社会主義理論、彼の社会主義論の正当性を証明する基礎を与えようとしたのである。またエンゲルスは、『補遺』で「私が主として問題としたのは、ブルジョアジーとプロレタリアートの相互の地位と、これら二つの階級のあいだの闘争の必然性を述べること」⁽⁴⁾であると指摘している。もちろん彼は単に階級闘争の必然性を抽象理論として記述しようとしたのでなく、「的確な反駁の余地のない事実によって」⁽⁵⁾「証明」するということであった。

以上のようにエンゲルスは、『状態』において、彼の哲学、一般的経済理論、社会主義理論そのものを記述しようとしたのでなく、それらを、イギリスという特定の国の現実的具体的歴史的状态という事例によって、実証しようとしたのである。と同時にそれは、彼の哲学、一般的経済理論、社会主義理論をもって、イギリスの労働者階級の状態を現実的具体的歴史的に認識しようとすることである。ここに『状態』の基本的な課題がある。

エンゲルスはこの課題をイギリスの労働者階級の状態の研究を通じて、果すのであるが、そうしえた歴史的事情は二つある。一つは、何よりもエンゲルスがイギリスに渡ったという歴史的事情である。エンゲルスの思想形成にとってイギリスへの赴任という事情を与えた影響は絶大なものがあつた。彼がイギリスに行かなかつたなら『状態』は書かれなかつたろう。しかもエンゲルスがイギリスの労働者階級の状態の分析を志した際に、それを可能にしたのは、すでに、イングランドだけであるとはいへ、「プロレタリアの状態が古典的な形態で完全⁽⁶⁾に存在し」ており、資料もある程度存在したということである。

こうした歴史的事情を背景にして、エンゲルスは『状態』研究の課題を果すことになるが、この場合、エンゲルスが『状態』研究を行うようになった直接の動機は何であつたろうか。この点について、エンゲルスは、次のように指摘している。まず第一に、「ドイツの社会主義と共産主義は、その他の国のどれにくらべても、たぶん理論

的な前提から出発」するといふ思弁的傾向が強く、かつ「プロレタリアートの現実の生活状態は、わがドイツの理論家たちのあいだではほとんど知られていな」かったので、「わがドイツ人にとつては、なによりもまず、この問題における事実の知識が必要⁽⁷⁾」であつたのである。エンゲルスはこの要求に応える必要があつたわけである。

そして同時に彼は、「イギリスで、プロレタリアートの貧困と抑圧を生じさせたのと同じ根本原因が、ドイツにも同じように存在し、長いあいだには同じ結果を生みだすにちがいない⁽⁸⁾」といふことをドイツのプロレタリアートに証明しこのことを自覚させようとしたのである。ただしこの事情からもわかるように、エンゲルスは、彼の哲学や経済理論、社会主義理論の正しさを実証しようとする場合、イギリスの労働者階級の状態という個別的な実態の分析によつて、一般的に実証しようとした、といふことがわかる。逆にいえば、エンゲルスは、この段階ではフランスやドイツと対比して、主としてイギリスの労働者階級の状態の特殊性、従つてイギリスの社会革命の特殊性をまだ問題にしようとはしなかつた、といふことができる。

以上のように、『状態』の研究の対象、目的の考察から、『状態』が『資本論』のような理論経済学と異つた一つの特異な学を形成していることがわかるだろう。『状態』はいわゆる宇野理論の『現状分析』に相当するといへよう。この点については後に検討することとし、ここでは、『状態』の概念についてふれておきたい。

エンゲルスが本書で用いている「労働者階級の状態」という場合の「状態」という用語は、ドイツ語で Lage⁽⁹⁾であり、英語でいう condition⁽¹⁰⁾にあたる。自然科学でも「状態」という概念があるが、それはドイツ語の Zustandであり、根本的に異つた概念を表わしている⁽¹¹⁾。Lageは、辞典にある通り、社会における位置とか境遇とかを表わす言葉である。そこでエンゲルスは、労働者階級の社会的現実的具体的歴史的總体的な実態を Lage という用語で示したものと考へる。エンゲルスの労働者階級の「状態」Lage という概念は、すでにのべたような研究対象から

わかるように、特定の国の労働者階級の具体的歴史的な姿、しかも労働者階級の包括的な姿を表わすものであるというべきだろう。

ところが、これまでエンゲルスの『状態』についての検討が加えられなかったこともあって、労働者階級の「状態」の概念が問題にされてこなかった。たとえば、クチンスキーは膨大な『労働者状態史』をものとして、エンゲルスの『状態』についての方法的検討を回避しており、しかも「状態」概念も明確にしていない⁽¹²⁾。

もっとも私は、決して労働者階級の歴史的な実態研究をすべて「状態」研究という名で行うべきであると主張しようとしているわけではない。「実態」という名でやるのもよし「労働問題⁽¹³⁾」という名でやるのもよい。問題は、その内容であり、それを規定する方法論である。ただ私は、エンゲルスの『状態』方法論の検討を通じて、エンゲルスの見地に基本的に賛成する立場から、労働者階級の包括的な実態分析の研究対象を『労働者階級の状態』と呼び、その学を労働者階級の実証的歴史分析としたいと考えるのである。

- (1) マル・エン全集第二巻、二二七頁。
- (2) 同上、二二七頁。
- (3) 同上、二二七頁。
- (4) 同上、六一五頁。
- (5) 同上、六一五頁。
- (6) 同上、二二七頁。
- (7) 同上、二二八頁。
- (8) 同上、二二九頁。
- (9) Die Lage der arbeitenden Klasse in England, Marx-Engels, Werke (Diets Verlag), Bd 2, S. 334.
- (10) 例えば、クチンスキーの『イギリスにおける労働者の状態』は、Conditions of the Workers in Great Britain Ⅱ

ある。クチンスキー『戦後西ドイツの政治と経済』（未来社、宇佐美他訳）の訳者あとがきの著作年表参照。

(11) この点については坂本賢三「運動の定式化について——状態のカテゴリーについての一考察——」大阪経大論集第二七号参照。

(12) 例えば一連の『労働者状態史』Die Geschichte der Lage der Arbeiterの「理論篇」として書かれた邦訳『絶対的窮乏化論』（有斐閣、新川訳）を参照。ここではなんら『状態史』の方法論を述べていない。

(13) 例えば岡谷小林兵衛『日本資本主義と労働問題』が、ほぼそうしたものであるが、しかし本書の方法論はエンゲルスの基本的構想と可成り異なるものであり、私も本書の方法論については大いに疑問がある。この点は別の機会に論じたい。

二、『状態』研究の理論的前提

エンゲルスは、『状態』への一八九二年のドイツ語版の序言において、「本書の一般的立場が——哲学的、経済学的、政治学的な点で——私の今日の立場とけっしてびったりとは一致しない⁽¹⁾」と指摘しつつも、「私はこの若いころの労作をもう一度通読してみて、これをすこしもはずかしの必要はないことを知った⁽²⁾」と述べている。

そこで我々は、後のエンゲルスの成熟したマルクス主義理論とびったりとは一致しないが『状態』の研究の方法原理となり、研究方法を直接規定した当時の彼の哲学的、経済学的、政治学的立場がどのようなものであったかを明らかにしなければならぬ。そして、エンゲルスの当時の思想総体の中で占める『状態』の学的位置を明らかにしたい。

しかしながら、ここでは枚数の都合で『状態』の一般的立場についての検討は割愛しなければならない。この点については、前掲拙稿⁽³⁾でごく一般的であるが述べてあるので、それを参照していただきたい。従ってここでは、要点を述べるだけにとどめる。

エンゲルスは、すでに二〇才前後で有能なヘーゲル左派の哲学者となっていたが、一八四二年末に商用でイギリ

スに渡り、そこで資本主義の現実に接見し、政治経済学を学ぶことになった。エンゲルスは、イギリス資本主義の研究を通じて、一八四三年末から四四年の中頃にかけて、基本的にヘーゲル観念論を克服し、唯物論的見地に立った。しかもその際彼の唯物論は、はじめからフォイエルバッハのような非歴史的・機械的な唯物論でなく、歴史的で弁証法的な唯物論、すなわち基本的に史的唯物論であった。我々は彼の史的唯物論的見地を『国民経済学批判大綱』（一八四三年末から四四年一月にかけて執筆）や『イギリスの状態』と題する三つの論文（一八四四年一月から三月にかけて執筆）にみる事ができる。

エンゲルスの経済学的立場は、まず初めに、渡英後直ちに行われたイギリス資本主義を中心とするところの下の研究をへて、一八四三年末から四四年一月にかけて、古典派経済学の基本的カテゴリーの批判へ進み、ブルジョア社会の構造的把握に成功するまでに至った。この成果が『国民経済学批判大綱』にほかならない。この『大綱』は杉原四郎氏の指摘するように、「社会主義の立場からするはじめての包括的な経済学批判に成功した」ものであり、それ故に『状態』にもられた豊富な内容を整理する正しい規準を提⁴供したのである。

彼の政治学的立場についていえば、すでに一八四二年の秋にヘスを介して共產主義者となったエンゲルスは、史的唯物論とブルジョア社会の構造的把握を基礎として、科学的社会主義の見地に立つようになっていた。前記『イギリスの状態』の論文では、階級闘争の必然性、社会革命の不可避性、プロレタリアートの世界史的使命について一般的な理論が展開されており、特に『大陸における社会改革の進展』（一八四三年一〇月執筆）は、空想的社会主義を批判し、科学的社会主義を主張している。

以上のように、エンゲルスが『状態』執筆（一八四四年一月から四五年三月）に先立つ、一八四三年末から四四年初めには、エンゲルスの哲学的、経済学的、政治学的立場は、後にマルクス主義とよばれる一般的見地に不十

分ながら基本的に達している、あるいは、体系的に記述されていないといえマルクス主義を具体的に萌芽的に一般的に成立させていた、ということが出来る。私はこうした段階のエンゲルスの思想をマルクス主義体系の生成段階と呼んでいる。この段階では、確かに後のマルクス主義体系のように明確に確立しては、少なからず誤謬や不十分さをもっている。しかしそれにもかかわらず、それは、ブルジョアの理論の根本的批判に成功しており、しかも、マルクス主義の基本的三構成（哲学・経済学・政治学）が有機的関連の中で一般的に展開されている。

エンゲルスの以上のようなマルクス主義の萌芽的体系は、『状態』研究の方法原理をなしたことはいうまでもない。従つてもしエンゲルスのそうした思想的到達がなかったとすれば、『状態』は書かれなかったであろうし、もし書かれたとしても、あれほどの科学的成果をもたらさなかつたであろう。エンゲルスの『状態』研究の理論的前提は、『状態』において具体的に応用されており、かくて『状態』は、エンゲルスの一般的理論をより特殊化し、一般論を実証的に展開するものとなっている。ここに私は、『状態』の学としての性格をみたいと考える。

(1) マル・エン全集第二巻、六六九頁。尚邦訳では政治的となっているが、原典では *politisch* なので政治学的と訳しておいた。Werke, Bd. 2, S. 641.

(2) 同上、六六四頁。

(3) 前掲拙稿では一節でこの点を論じてある。尚、最近出版された広松涉『エンゲルス論 その思想形成過程』も、私の視点と幾分異なるが第四章で、この時期のエンゲルスの思想を分析し、そこで私見をほど実証しているので、併せ参照されたい。

(4) 杉原『国民経済学批判大綱』再論「関西学院大学『経済学論集』五の六号、七頁。

その他『大綱』についての研究論文は、杉原『マルクス経済学形成への一礎石——エンゲルス『大綱』研究序説』、後掲佐藤論文参照。

三、『状態』の研究方法

① 『実証的歴史分析』としての『状態』

『状態』は研究対象、課題、エンゲルスの当時の思想總体の位置づけから、いわゆる『現状分析』⁽¹⁾に相当するものであることがわかった。しかし私はいわゆる宇野理論の立場をとらないので、厳密には『現状分析』という方法論概念を受けいれることはできない。

私は宇野氏と異って、科学を二つの段階に分けるべきだと考えている。すなわち、科学は主として対象の一般的特殊な理論的認識をめざす『理論的科學』と、『理論的科學』を方法原理とすることによって、対象を個別的具体的に認識しようとする『実証的科學』とに分けられる。

こうした見地は、マルクスの見地に基づくものである。例えば、マルクスは『経済学批判』の当初のプランで三部作を構想し、第一部として、「経済学諸範疇の批判」「或いはブルジョア経済学の批判的叙述」。第二部として「経済学と社会主義との批判と歴史」、第三部として「最後に、経済学的諸範疇または諸関係の発展の簡単な歴史素描」⁽²⁾を書く計画をたてている。第一部は、いわゆる『経済学批判』体系として、その基本的部分は、『資本論』として完成されたことは周知のことである。『この経済学批判』は、エンゲルスが批評しているように、「経済科学の全複合体の体系的総括を、ブルジョアの生産とブルジョアの交換との諸法則の連関のある展開をくわだてているのである」⁽³⁾。そしてその「方法」は「論理的展開」⁽⁴⁾である。我々は、これを一般的には『理論的科學』⁽⁵⁾、特殊的には『理論経済学』と呼ぶのである。そして、この「論理的展開」は、「歴史的経過の映像」⁽⁶⁾を包摂している故に、宇野氏のように理論体系の展開を『原理論』と『段階論』とに分断することなく、いわば両者を統一的に包摂する

のである。

一方マルクスが意図した「経済学的諸範疇または諸関係の発展の……歴史的素描」は、『経済学批判序説』でいうところの『現実的な歴史記述』⁽⁷⁾にほかならない。これを私は、一般的には『実証的科学』⁽⁸⁾、特殊的には経済学分野では『経済史学』、社会科学総体では、『社会史学』、あるいは自然科学以外は一般的に狭義の実証的な『歴史的科学』⁽⁹⁾とよんでもよいだろう。そして、例えば『理論経済学』が「近代ブルジョア社会の理論的な分析」⁽¹⁰⁾であるのに対して、『実証的歴史科学』が、ブルジョア社会の歴史的分析であるとすれば、後者を『実証的歴史分析』とも呼べるだろう。もともとマルクスは、彼の研究の中心を『理論経済学』の構築においたため、完成された体系的な『実証的歴史分析』の模範を我々に残さなかった。しかし⁽¹¹⁾彼は部分的な成果を残している。ほかならぬ『状態』もこの系列の著作の一つである。

マルクス主義的な『実証的歴史科学』は、マルクスが『批判序説』で述べているように、「科学的に正しい方法」⁽¹²⁾に基づくものでなければならぬ。すなわち、経済学の例でいえば下向的分析によって達成された諸カテゴリーを「抽象的なものから具体的なものへ上向する方法」⁽¹³⁾に従って構築された「経済学の諸体系」⁽¹⁴⁾を前提し、その体系を方法的原理にすることによって、具体的な国の経済過程の諸現象を認識するものでなければならぬ。このように『実証的歴史科学』は『理論的科学』を前提してのみ成立し、かつ『理論的科学』の上向的展開の延長線に位置するのである。従って、『実証的歴史科学』は、特殊的に研究方法としては分析的であるとしても、一般的には総合的なのである。

『状態』は以上のように、『理論的科学』を理論的前提とするところの『実証的歴史科学』である。そして『状態』は、その内容から明らかなように単に経済科学でなく、労働者階級の経済的側面だけでなく政治的側面（こ

では上部構造をこうよんでおく)を研究対象とした、統一的総合的な社会科学の一分科である。この社会科学の一分科としての『状態』は、萌芽的に成立させた体系的マルクス主義の『理論的科学』の側面を理論的前提とした労働者階級の『実証的歴史分析』である。従って『状態』は、一部の論者が一面的に把えているように、単に『資本論』の上向的展開からみた「下向」研究過程での諸¹⁴「労働」であるというだけでなく、本来『理論的科学』を、『理論的科学』の研究過程の出発点となった「現実的で具体的なもの」「現実的前提」にまで上向させることによって成立しえた総合的な労作なのである。次に我々は、『実証的歴史分析』としての『状態』の固有の研究方法を検討しよう。

- (1) 宇野氏の『現状分析』は、原理に媒介されるところの段階論の規定を「基準」とするところの「具体的なる歴史的過程に対する解明」にほかならない。『経済学方法論』六〇—一頁。大雑把にいえばこの見解に同意できるが、厳密には賛成できない。宇野氏の三段階論及び『現状分析』論については、ここで立入る余裕がない。
- (2) 一八五八年二月二二日付のマルクスからラッサールへの手紙参照。『資本論に関する手紙』法大出版上巻、七七頁。
- (3) エンゲルス「マルクス『経済学批判』」『経済学批判』岩波文庫版、二六〇頁。
- (4) 同上、二六八頁。
- (5) 坂本賢三氏は「科学のもっとも科学たるゆえんは、カテゴリー分析によって自然認識・社会認識をより統一的により一般的につくりあげることであって、科学のこの部分を『理論的科学』とよぶ」と指摘している。同氏「カテゴリー論」『講座今日の哲学』第三『科学論』所収、一八五頁。
- (6) エンゲルス前掲論文、『経済学批判』二六五頁。
- (7) 同上、三二五頁。
- (8) マルクスは『ドイツ・イデオロギー』の中で「現実的な実証的科学」wirkliche, positive Wissenschaftとさう用語を用いている。マル・エン全集第三巻、二三頁。Werke, Bd. 3, S. 27. そのマルクスは、ヘーゲルなどの思弁的科学に対して「実証的科学」を対置しているのであり、そこでは実証性をもった理論が問題になっている。こうした点を考慮す

る広義の『実証的科学』に対して、私はここで『理論的科学』に対立するものとして、狭義の意味での『実証的科学』という用語を用いたい。

(9) エンゲルスは前掲論文で「自然科学でないすべての科学は歴史的科学」(『経済学批判』二五四頁)であるといっているが、この『歴史的科学』historische Wissenschaft (Werke, Bd. 13, S. 472)を広義の意味とすれば、ここでは、社会に關する『理論的科学』に対立するところの「社会発展の歴史的過程をその具体的な多様のままに研究する」「歴史学」(ソ連アカデミー『経済学教科書』第三版、合同書店版、一八頁)を意味する狭義の実証的な『歴史的科学』という用語を用いたい。

(10) 前掲エンゲルス論文『経済学批判』二五四頁。

(11) 例えば『ブルジョアブルル十八日』、『ドイツ農民戦争』、『国家の起源』など参照。レーニンの『ロシアにおける資本主義の発達』もこの系列に属する。

(12) 『経済学批判』三二二頁。

(13) 同上、三二三頁。

(14) 同上、三二二頁。

(15) 井村喜代子『批判』プランと『賃労働』について、『経済評論』一九五七年二月号、一〇〇頁。

② 『状態』の研究過程での方法

エンゲルスは、一八四二年末に渡英するやみずから書いていたように、「イギリスの状態の研究に没頭し」、⁽¹⁾ 一八四三年末から四四年にかけてこれまで何人もなしえなかつた史的唯物論、ブルジョア経済学の根本的批判、そしてブルジョア社会の構造的把握に基づく科学的社会主義の理論を、萌芽的であるがマルクス主義的な一般的体系として構築することができた。今度はエンゲルスは、逆にこうした理論を生みだす土壌となつたイギリス資本主義の『実証的歴史分析』を計画している。

エンゲルスは『状態』の序文で、『状態』を当初「イギリスの社会史にかんするもつとも包括的な著作のほんの一章として書こうと考えていたのであるが、その重要性のためにやがてこの対象だけを独立に論じることが必要」となった、と述べている。我々は、ここでエンゲルスが『イギリスの社会史』をいかなる目的で書こうとしたかを検討しておきたい。

エンゲルスは『批判大綱』の末尾で、「機械のおよぼす影響に注目することによって、私は他のもつとかけはなれた主題である工場制度に達するのであるが、私はここでそれを取扱う気持もその余裕もない。とはいえ、私はやがて機会をえて、この制度のいとうべき不道徳性をくわしく叙述³⁾したいと指摘し、労働者階級の状態の記述を含む『イギリスの社会史』の分析を『国民経済学批判』と主題を異にするものとして行うことを示唆している。しかし、結局エンゲルスは当初予想した『イギリスの社会史』を書くことができなかつたことは、『状態』の中で、革命の歴史や現状についての詳しい「叙述は、将末のもつと包括な労作のために留保しておかねばならない」と指摘していることから明らかである。その代りに、我々は、『イギリスの社会史』のための修作ともいふべき小論文『イギリスの状態』という三論文をみることができる。エンゲルスはこの第一論文で「文明史上で大ブリテン王国が今日占めている地位を判断するための基準とすべき諸原理」つまりエンゲルスのいうところの『社会哲学』Ⅱ史的唯物論をのべ、第二論文では「イギリス国民の発展についての必要な資料」をあげいわば経済情勢を分析し、第三論文では、『イギリスの憲法』という副題からわかるように上部構造の分析を行っている。『イギリスの状態』は出版の都合もあって途中で中断し、その全体の分析が示されなかつたが、我々はこの『イギリスの状態』で果そうとした課題から、同様に『イギリスの社会史』の課題を間接にくみとることができる。その課題とはすでに『大綱』で把握したところの古典経済学の根本的批判とブルジョア社会の構造的把握、『大陸における社会改革の進展』で展

開かれているところの社会主義の一般理論を、イギリスという具体的社会の中で、歴史的に実証し、広松氏もいつているように「来るべき社会革命の展相と性格を見定め、大陸の運動家たちの参考に供する」という意図⁷⁾であったろう。

『イギリスの社会史』の分析の課題もこのようなものであったとみることができる。そして、この課題は『状態』に特殊に受継がれたことはいうまでもない。

エンゲルスは、当初『イギリスの状態』の続きとして「イギリスの状態」の「核心である労働者階級の状態」を「くわしく論⁸⁾」じると予告しているが、結局、『状態』として独立の著作として発表することになった。彼がイギリスにおける労働者階級の状態を独立の著作として発展することになった動機は、『労働者階級の状態』のもつ意義を『イギリスの状態』の執筆を通じて十分に意識するようになったことであろう。『イギリスの状態』の中でエンゲルスは、「イギリスを救う力は彼ら（労働者階級——引用者）のうちからでてくる⁹⁾」こと、「イギリスの社会革命は」「労働者の民主政治によって」¹⁰⁾実現されることを指摘している。

かくしてエンゲルスは、一八四三年末から四四年にかけて形成したところの萌芽的マルクス主義体系を、『イギリスにおける労働者階級の状態』の歴史分析によって、事実をもって、具体的に実証しようとしたのである。と同時に、そうすることによってイギリスの労働者階級についての具体的歴史的な認識を行なおうとしたのである。

エンゲルスは、「イギリスの労働者階級の状態」について、「二一ヶ月のあいだ¹¹⁾」、「入手できるかぎりの公式および非公式のさまざまな文献を研究した¹²⁾」。彼はそれだけで満足することなく労働者を「住宅にたずね¹³⁾」彼らの「日常生活を観察し」、彼らと「生活条件や苦悩について……語りあい」、彼らの「闘争を——目で見¹³⁾」たのである。エンゲルスは一方ではこうした「労働者階級」の分析を通じて、マルクス主義理論を生成させると同時に、他方では、

今度は『状態』という著作によつそれを具体的に実証し、労働者階級についてより具体的な認識を一般的に示そうとしたのである。エンゲルスは、彼の一般理論、就中、彼の労働者階級についての理論的把握を「十分な証拠を集め」⁽¹⁴⁾「事実」⁽¹⁵⁾によつて、「実証」⁽¹⁶⁾しようとしたのである。従つて『状態』の研究過程での方法は、収集した資料と見聞した諸事実⁽¹⁷⁾諸現象を、一定の理論的見地から分析し、本質的認識を演繹し、一般理論を、具体的歴史的現実⁽¹⁷⁾にまで上向させ、具体的諸条件の下で実証するといふものである。以上のように、『状態』の研究過程の方法の特質は『理論的科学』のそれが丁度「表象された具体的なものからますます稀薄な《一般的なもの》⁽¹⁷⁾にすんでいく」といふ、下向的で分析的な方法であるのに対し、「抽象的なものから具体的なものへ上向する方法」⁽¹⁸⁾として特徴づけられる。しかしこの上向的方法是、『理論的科学』では相対的に抽象的なカゴリーから具体的なカテゴリーへの上向的展開に限定されるのに対して、『実証的歴史科学』としての『状態』では、カテゴリーの理論体系から、『理論的科学』において「現実的前提」にすぎなかった「現実的で具体的」⁽¹⁹⁾な歴史的過程に飛躍的に上向するといふことが注意されなければならない。

エンゲルスは、このような方法に基づいて、イギリスにおける労働者階級の状態を科学的に認識することができたものと考へる。では次にエンゲルスはそれを如何に叙述したかを検討しよう。

- (1) マル・エン全集第一巻、四九五頁。
- (2) 同上第二巻、二二七頁。
- (3) 同上第一巻、五六九頁。
- (4) 同上第二巻、二三〇頁。
- (5) 同上第一巻、六二四頁。
- (6) 同上、六二四頁。

- (7) 広松前掲書、一七二頁。
- (8) マル・エン全集第一巻、六〇三頁。
- (9) 同上、五七二頁。
- (10) 同上、六一一頁。
- (11) 同上第二巻、五二九頁。
- (12) 同上、二二五頁。
- (13) 同上、二二五頁。
- (14) 同上、二二六頁。
- (15) 同上、二二八頁。
- (16) 同上、二二六頁。
- (17) 前掲『批判序説』、三二二頁。
- (18) 同上、三二三頁。
- (19) 同上、三一頁。

③ 『状態』の叙述方法

我々はまず『状態』の叙述方法について、エンゲルスによる直接の言及と実際の叙述自体を検討しよう。

『序説』と本論との篇別。

はじめに『序説』と本論の関係をみてみよう。『序説』では、すでにのべたように、イギリス労働者階級の前史、イギリス工業の発展、及び労資の政治的関係の要約がごく一般的に記述されている。エンゲルスは、それを「イギリスのプロレタリアの現状を理解するうえに必要な、少数の事から」と呼んでいる。ではエンゲルスは何故この「少数の事から」から『状態』の叙述をはじめたのであろうか。『イギリスにおける労働者階級の状態』はエンゲ

ルスが指摘しているように、当初『イギリスの社会史』の一章として、即ち『イギリスの社会史』の一環として叙述されるはずであった。このことからわかるように、あるいは彼のブルジョア社会の構造的把握からもわかるように、エンゲルスは労働者階級の具体的歴史的な認識は、それ自体孤立的に行われるのではなく、資本主義社会との有機的関連においてのみ行われるという見地に立っていたと思われる。従って、エンゲルスは『状態』の記述にあたって、『状態』を一般的に規定しているところの、プロレタリアートの前史、イギリス工業の発展、労資の政治的關係をまず一般的に分析しているのである。このように、エンゲルスは、『状態』を規定する『イギリスの社会史』をごく一般的に分析し、本論においてその特殊な側面としての『イギリスにおける労働者階級の状態』をより具体的に分析しているのである。この『序説』から本論への叙述展開は、一般から特殊への分析下向の方向を示しているのである。

本論の主要な篇別序列。

『序説』の叙述に次いで展開される本論は、すでにのべたように内容的に大別すると四つの篇に分けられる。第一篇に相当するのは「工業プロレタリアート」で、ここには、「大都市」の章から「労働運動」にいたるまで、工業プロレタリアートの経済的政治的な状態が全面的に分析されている。第二篇は「鉱山プロレタリアート」、第三篇は「農業プロレタリアート」に相当する。第四篇は分量こそ少ないが「プロレタリアートにたいするブルジョアジエの態度」の章の最後に、本書の「結論」として、イギリスの社会革命の見通しを論じている。以上の篇別についてエンゲルスは、「われわれが、これからプロレタリアートの種々の部門を観察する順序は、前述のプロレタリアートの発生史から自然に明らかになる」と述べている。すなわち、エンゲルスは『序説』の分析で示した結果に従って、「最初のプロレタリアートは工業にぞくし、工業によって直接生みだされ」、「したがって工業労働者、……

が……まずわれわれの注意をうばう⁽⁴⁾」として、「工業プロレタリアート」を分析しているのである。そして、次に「工業の飛躍的發展の結果としてはじめて重要となり」、こうして生みだされた「鉱山プロレタリアート」⁽⁵⁾を分析し、最後に「農業プロレタリアート」⁽⁶⁾を分析している。

以上のように、エンゲルスは『状態』の主要な叙述篇別の順序を論理的にでなく、プロレタリアートの「発生史」という全くの歴史的条件に基づいて歴史的に把えていることがわかる。しかもエンゲルスは、「工業プロレタリアート」にプロレタリアートの典型を見出し、「工業労働者の状態について……くわしく述べ」⁽⁷⁾他の部門のプロレタリアートの分析を簡略にするという典型分析の方法をとっている。そうしたのはエンゲルスがのべているように、工業プロレタリアートが「産業革命の長子」であり、「もつとも啓発されており」、「はじめから今日にいたるまで労働運動の核心であった」⁽⁹⁾ことを根拠にしている。ここでもエンゲルスは、プロレタリアートの歴史的な「位置」に基づいて篇別を把えているのである。

第一篇「工業プロレタリアート」の章別順序。

まず全体的にみれば、「大都市」の章から「労働部門」の章にいたる工業プロレタリアートの経済的側面の部分から、「労働運動」とブルジョア「階級の思想と行動との様式」⁽¹⁰⁾を分析した最後の章を併せた政治的側面の部分への移行が問題となる。土台の分析から上部構造への分析の上向は、史的唯物論の見地からみれば、当然のことである。しかし私は労働者階級の『実証的歴史分析』の場合には、次の点を強調しなければならぬと思う。マルクスの方法に基づけば、⁽¹¹⁾労働者階級という概念は経済的政治的に二重に握まねばならない。しかし単に二重であるというだけでは不十分である。階級とは、本来マルクスが指摘しているように個々人が「他の階級にたいして共同のたたかひをおこなうことになるかぎりにおいてのみ、一つの階級を形成する」⁽¹²⁾のである。その場合、労働者階級は

まず「経済的諸条件」の面から「即自的」⁽¹³⁾に階級を形成する。この段階での労働者階級の認識は、たとえそれが一般的であり、「对自的」な労働者階級の認識の土台をなすにしても現象的な段階にとどまる。労働者階級は、「経済的諸条件」を基礎に闘争において「結合」し「对自的」⁽¹⁴⁾な階級としての階級に自己形成する。労働者階級を即自的かつ对自的に認識する。労働者階級を即自的かつ对自的に認識する時、労働者階級は真に本質的に認識されたことになる。

従つて、エンゲルスの労働者階級の経済的側面から政治的側面への叙述の移行は、労働者階級の現象的認識からより本質的認識への分析、下向を意味する。そして、前者は労働者階級の一般的側面であるとすれば、後者はそれを基盤として「闘う」階級としての特殊な側面である。かくて、労働者階級の経済的側面から政治的側面への移行は、一般から特殊への分析、下向でもある。たとえばこのことは、エンゲルスの次の指摘によつても明らかである。彼は「諸結果」の章で、労働者階級の精神的墮落の原因を論じ「これらの原因が労働者の個人的性格に作用する範囲内で述べ」、「公的性格（即ち「プロレタリアートのブルジョアジーにたいする反抗」——引用者）については、われわれは、またあとでもつとくわしく述べなければならぬ」とのべている。この場合の労働者の個人的性格の反抗から公的性格への反抗が、一般から特殊、現象から本質への分析、下向にほかならない。

次に、「工業プロレタリアート」の経済的側面についての叙述順序をみていこう。実はこの問題の検討が一番難しいところである。というのは、エンゲルスの当時の経済学の水準においては、資本制生産の内在的法則の把握が未成熟であったため、叙述方法に若干の混乱がみられるからである。これまで『状態』の方法論研究を避けてきたのは、この点の困難に大きな原因があったともいえよう。ともかくもここでエンゲルスの叙述順序についての見解と事実関係を検討しよう。

エンゲルスの叙述順序についての言及によれば、経済的側面の分析は、まず二つにわかれる。すなわち、はじめは「大都市」の章から「諸結果」にいたる四つの章で、あとは「労働部門」についての二つの章である。この叙述順序はエンゲルスによれば「工業プロレタリアートの個々の部門の状態も、彼らすべてが工業にぞくしている、というそのことのために多くの共通点をもっているので、われわれはまずこの共通点を取りあげて一般的に論じなければならぬ。そうすることによってわれわれは、あともつと厳密に、個々の労働部門のそれぞれの特色を観察することができるであろう」という理由に基づいている。これは形式からみれば明らかに一般から特殊への分析、下向にほかならない。しかしこの叙述形式は問題を含む。この点は後に検討する。

さて、エンゲルスのいう工業プロレタリアートにとって一般的に「共通点」をもつところのものは「大都市」、「競争」、「アイルランド人の移住」、「諸結果」の四つの章である。エンゲルスはこれらの章をどのように叙述しようとしたのであろうか。

エンゲルスは「大都市」の章から分析をはじめにあたって、工業の発達が大都市を生みだした事情をのべ、「大都市では、工業や商業がもつとも完全に発達するので、それだけにこの大都市ではプロレタリアートにたいするこの発達の影響もまたもつとも明瞭にそしてもつと公然とあらわれる」とし、「プロレタリアがどんな境遇にあるか、大都市は彼らにたいしてどんな影響をあたえているか」を「研究する」と指摘している。かくてこの章で具体的にエンゲルスは、資本主義「社会は、労働者にたいして、その労働の報酬として住宅、衣服、食物のかたちでどれだけの賃金をあたえているか、社会はまた、社会の生存のためにもつとも多く貢献している労働者にたいして、いったいどんな生存をかなえてやっているかを」分析している。この内容はいうまでもなく、一九世紀前半の都市労働者の主要生活手段の悲惨な消費生活状態の分析である。この指摘でわかのように、エンゲルスは、まず労働者階

級の経済的状态のうちの現象的側面すなわち労働者の生産関係の結果として現われる分配物の消費を分析している。しかも、それは客体的な生活手段の消費のみが分析され、消費による労働力の生産の側面は後（「諸結果」の章）に保留されている。

エンゲルスは「大都市」の章の分析を終えるに当って「いまやわれわれは、その（窮乏化せる消費生活状態の——引用者）原因をやや詳細に考察することしよう」とのべ、「プロレタリアートにたいしておよぼす競争の影響を考察」する。すなわち彼はまず第一に「個々の労働者のあいだにおこなわれる競争の結果」を分析し、労働者の競争が必然化するプロレタリアートとしての生存条件、競争を媒介する賃金変動を分析する。第二に労働者の「大規模」な競争としての「過剰人口」⁽²³⁾「失業予備軍」⁽²⁴⁾の発生とその作用、を分析し、それが「全般的な貧困」⁽²⁵⁾を生みだすことを分析している。最後に「失業予備軍」自体の生活状態を分析している。

「アイルランド人の移住」の章では、エンゲルスによれば、「イギリスの労働者のおかれているどうにもならぬ屈辱のいま一つの原因、いまでも引きつづきこの階級の地位をますます深くおしきけるはたらきをしている一つの原因」⁽²⁶⁾として「アイルランド人の移住」を分析している。ここでエンゲルスは、「アイルランド人の移住」を「大規模」な競争の特殊形態として把握、アイルランド人が自国では失うものがなく、本国でうるものが多かったので、本国の大都市におしよせ、本国労働者の強力な競争者となっていることを分析し、この章を「競争」の章の続きとしている。エンゲルスはこのように、第一に労働者の経済的生活の現象的側面、消費生活部面を分析し、第二に、労働者の競争状態を今日的にいえば労働市場での状態を消費生活における貧困現象の原因として、本質的部面の分析として行っている。

最後の「諸結果」の章では、エンゲルスによれば前三章でみた「境遇のもとで、労働者そのものはどうなったの

か、彼らはどんな人間になつてゐるのか、彼らの肉体的・知的・道徳的状态はどうなつてゐるか」が分析されてゐる。彼は、本章と前三章との關係を次のように把えてゐる。「われわれは、以上で、イギリスの都市労働者階級のおかれてゐる生活状態をかなりくわしく観察しおつたので、いまやこれらの事実からさらに包括的な結論をひきだし、またこれらの結論をあらためて事実と比較してみるときであらう」と。すなわちエンゲルスは、労働者の客観的生
(28)

活条件としての住衣食の消費生活状態、更にその貧困を生みだす労働者の競争状態(すなわち労働市場の状態)から「結論」として劣悪で非人間的な労働者の肉体的・知的精神的状态をひきだし、それを実証的に分析してゐる。

以上のように、工業プロレタリアートの「共通点」をもつた経済的側面の叙述方法は、形式的にみれば、消費生活という労働者の客観的な現象的条件の分析から、それらの結果の原因としての労働市場を分析し、更にそれらの原因と結果から更に労働者の肉体と精神の状態といひわば労働者の主体的条件の荒廢現象を分析する方法をとつてゐる。概していへば、この叙述順序は現象から本質への分析、下向によつて労働者階級の経済状態についての科学的認識を帰納しようとしてゐることを示してゐる。しかし、これまでの分析による限りでは第一に、「競争」の位置が果して妥当か、第二に、以上の分析で労働者階級の経済状態が全面的に分析されてゐるのか、という疑問が生じる。

第一の点について。労働者階級の消費生活状態の貧困を労働市場の面から説明すること自体けつして不当ではない。しかし、単に貧困の原因を競争という外的な關係でのみ説明するにとどまるならば、本質的認識としては十分であらう。ところが当時のエンゲルスは、多分にそうした傾向をもつていたのである。ここに叙述方法の混乱の直接の原因がある。

当時のエンゲルスの経済理論の最大の欠陥は、資本制的生産法則の認識における「競争論的接近」⁽²⁹⁾である。例え

ば、『国民経済批判大綱』では、「私的所有が存立するかぎり結局いっさいが競争に帰着」し、「競争の矛盾は、私的所有そのものの矛盾とまったく同一」⁽³⁰⁾であると把握されている。この把握が資本主義的競争を競争一般に、資本主義を私的所有一般に解消するという傾向をもつ点をここで問わないが、エンゲルスは資本主義の矛盾をすべて私的所有⁽³¹⁾競争として説こうという姿勢をとっていることは明らかである。ここから「競争が窮乏、貧困、犯罪の原因である」という原理がでてくるし、『状態』でもこうした見地に基づいて分析が行われることになる。当時のエンゲルスは、『資本論』でいうところの「競争」は「資本制生産の内在的法則が資本の外的運動において現象」⁽³²⁾したものであるという正しい見地に到達していなかった。エンゲルスは明確に「資本制生産の内在法則」を一般的に把握していなかった。むしろ彼は、そうしたものを競争の法則として、内的法則を外的法則によって把握しようとしていたのである。かくしてエンゲルスは、消費生活の貧困の原因を競争によって説明するという方法を、『状態』の経済的側面の前半の分析に用いているのである。

第二の問題点。第一の問題と関係するがエンゲルスは、「共通点」の部分の分析で工業プロレタリアートの経済的側面の分析をすべて終ったものとしているわけではない。前半では明らかに、労働過程の分析が欠けている。ところがいわゆる「労働部門」の二つの章は、内容的には主として工業プロレタリアートの労働過程における労働者の状態の分析にあてられているのである。

今ここで「個々の労働部門」の叙述内容の概要を示せば、第一に、「機械的発明の進歩」⁽³³⁾によって直接生みだされる結果、すなわち機械の導入による失業者の発生、その賃金引下の誘発、婦人子供労働の採用、その結果としての婦人子供の肉体的精神的荒廃、などが分析されている。第二に、「労働方法」⁽³⁴⁾とその及ぼす影響が、すなわち夜間労働や長時間労働の労働者の身心に及ぼす影響、を分析している。第三に「工場法」⁽³⁵⁾の成果と欠陥が、すなわ

工場法の実態を通して資本の破壊的作用への制限とその限界が分析されている。第四に、工場制度の「精神」にたいする影響、すなわち労働者の精神的腐朽と逆の発生とを分析している。第五に「奴隸制度」³⁷⁾としての「工場制度」を、工場規則、罰金制度、トラックシステム、小屋制度、などとして分析している。「その他の労働部門」の章もほぼこうした分析内容になっている。

以上の分析からわかのように、エンゲルスは、「大都市」から「諸結果」の四章を形式的には工業プロレタリアートの一般的側面として、本二章を特殊の側面として一般から特殊へ分析を進めるという方法を示したのであるが、しかし、実際の分析内容からみれば後半は、特殊の分析ではなく、前半に欠けていた労働過程の部面をはじめて分析したことになる。従ってそれを前半との関連でとらえれば、ここではじめて、工業プロレタリアートの消費生活状態と労働者の肉体的・精神的状態、労働市場の状態、労働過程Ⅱ直接搾取過程の状態を通じて、労働者階級の再生産過程（資本による労働力商品とその担手の生産・流通・消費の統一的過程）が全面的に分析されたことになる。工業プロレタリアートの経済的側面の基本的な叙述順序は、内容的にみれば、賃金による消費生活状態、それによる労働力の肉体的精神的生産の結果としての労働者の肉体的精神的状態、という分配関係の結果（消費生活）から、直接分配関係を規定する労働市場の状態（労働者間の各種の競争状態）、更に労働者の本質的生産関係を示す直接的生産過程（搾取過程としての労働過程）へと労働者階級の現象から本質への分析、下向である。

以上のように全体としてみてみると、競争論的接近に災いされてエンゲルスが設定して「共通点」の分析順序を解体し、「大都市」と「諸結果」を一括し、次いで「競争」の二章をおき、最後に「労働部門」の二章をおけば、整合的になると同時に、エンゲルスの基本的態度がより明確になる。

しかも、エンゲルスの『競争論接近』は、労働過程の分析によって、実質的には資本の内在的法則の把握、『資

本一般的接近』への下向となつてゐることがわかる。このことはエンゲルスの、「貧困の原因は社会、関係、すなわち競争⁽³⁸⁾」といった表現からもわかる。彼は競争を競争としてだけつかんだのではなく社会関係の総体として把握しており、ここには不十分なが内在的な関係が包まれているのである。従つて、「いまや本書（『状態』のこと——引用者）をすこし注意するならば、競争があり、ブルジョアジー、プロレタリアートがあるが資本主義が欠けている⁽³⁹⁾」と主張する大月版マル・エン選集の「解説者」の見解は、全く根拠のない暴言である。我々は、マルクスが『状態』に与えた評価、すなわち「エンゲルスが資本制的生産様式をいかに深く把握したか⁽⁴⁰⁾」ということを示すのは、まさに、『競争論的接近』にもかかわらず、「労働部門」の二つの章で搾取過程⇨労働過程の分析を行い、『資本一般的把握』への下向が実体的に進んでいることにあるとみるべきである。

各章の叙述方法。

最後に個々の章の叙述方法についてみておきたい。

例えば、『序説』の「イギリス工業の発展」についての叙述方法についてみると、エンゲルスは、「まず主要部門である木綿工業からはじめる⁽⁴¹⁾」。この点もエンゲルスの言及はないが、この業種の歴史的位相からみて、まず木綿工業の分析を始めてゐることは明らかである。エンゲルスは、年代順に原綿の輸入量と綿製品の輸出量、更に動力、労働力の数、綿工業の地域分布をあげ、綿工業の発展のあとをたどつてゐる。こうした叙述方法は、時間的・空間的諸条件を導入したイギリスの個別的な歴史過程の分析である。他の章においてもこの点は全く同様である。

以上がエンゲルスの言及と事実関係に即した『状態』の大雑把な叙述方法である。最後に『状態』の叙述方法を『理論的科學』の叙述方法と対比することによつて、『状態』の叙述方法の特徴を明確にしたい、と思う。

『理論的科學』の叙述方法は、一般的にいえば下向的に帰納した単純なカテゴリーを具体的なカテゴリーへ上向

的に展開する論理的方法である。これに対して『状態』の方法は、一般的理論によって演繹的に認識された現実的・歴史的過程を、具体的に歴史的条件に基づいて分析的に叙述するという歴史的方法である。『理論的科学』の叙述の端緒は、最も抽象的なカテゴリーの理論的分析である。これに対して『状態』では、『序説』の分析で明らかのように具体的で現実的な歴史総体の一部の歴史的分析から始まっている。これは、マルクスが『批判序説』で、「あるあたえられた国を経済学的に考察するときには、われわれは、その国の人口、その人口の諸階級への都市、農村、海洋への、さまざまな生産部門への配合、輸出と輸入、年々の生産と消費、商品価格等々からはじめる」といっている方法に、ほぼ一致する。そして『理論的科学』では、具体的現実的歴史を、単純なカテゴリーから具体的カテゴリーへ向上する「多くの規定の総括」⁽⁴³⁾理論体系として把握する。これに対して『状態』では、具体的現実的歴史を、労働者階級の一般的理論的立場から、いくつかの具体的、現実的要素を現象的なものと本質的なものと、一般的なものと特殊なものに分割し、それを分析していくことによって、全体の内的関係を与え、労働者階級の状態を包括的に認識しようとする。

『理論的科学』では、現実的具体的歴史過程は、理論に実証性をもたせるために「歴史的な例証、つまり現実とのたえまない接触」⁽⁴⁴⁾として部分的に取扱われる。あるいは論理的歴史的方法といわれるように、歴史を歴史の一般法則として理論に反映する。『状態』の場合は、理論を前提として、いわば論理的に歴史をあつかい「歴史的形態と攪乱の偶然というおおい」⁽⁴⁵⁾を分析し、現象から本質的認識を帰納する、という叙述方法をとっている。『理論的科学』の「例証」が個々の理論に対応する部分的歴史であるのに対して、『状態』における歴史は全面的な歴史的分析であり、従って全体として総合的である。従ってある論者が『資本論』は、労働者階級の状態の叙述をするのに、まず絶対的剰余価値に関連して労働日からはじめているが、エンゲルスの本書では人口の集中、都市にお

ける住居状態がまずあらわれてきている。吾々はこうした叙述の形式にもフォイエルバッハ的共産主義の残滓を感じるのである⁽⁴⁶⁾と批判するのは、完全な誤りである。この論者は、二重の混乱の上に誤った批判をしている。第一に、この論者は、『理論的経済学』としての『資本論』と『実証的歴史分析』としての『状態』の学的相異を全く無視し、両者を同一の方法論的次元のものとして扱っている。第二に、『資本論』の『例証』としての『イギリスにおける労働者階級の状態』と『実証的歴史分析』としての『状態』を同次元の問題として扱っている。かくて、論者は、両者の相異をもって『状態』の方を「フォイエルバッハ的共産主義」的偏向をもつものと批判するのである。

- (1) マル・エン全集第二巻、二三〇頁。
- (2) 同上、五三三頁。
- (3) 同上、二四七頁。
- (4) 同上、二四七頁。
- (5) 同上、二四七頁。
- (6) 同上、二四七頁。
- (7) 同上、四七八頁。
- (8) 典型分析は他の章でも用いている分析方法であるが、歴史の網羅的分析が困難である以上、代表的事例の詳細な分析は、認識深化の有効な方法である。
- (9) マル・エン全集第二巻、四七八頁。
- (10) 同上、五二九頁。
- (11) たとえば拙稿『現代資本主義における労働者階級とは何か』、雑誌『現代の理論』三一号参照。
- (12) マル・エン全集第三巻、五〇頁。
- (13) マル・エン選集第一巻大月版、四四九頁。

- (14) 同上、四四九頁。
- (15) マル・エン全集第二巻、三五六―七頁。
- (16) 同上、二四七頁。
- (17) 同上、二四九頁。
- (18) 同上、二五三頁。
- (19) 同上、三〇五頁。
- (20) 同上、三〇六頁。
- (21) 同上、三〇六頁。
- (22) 同上、三一二頁。
- (23) 同上、三一二頁。
- (24) 同上、三一五頁。
- (25) 同上、三一四頁。
- (26) 同上、三二〇頁。
- (27) 同上、三二六頁。
- (28) 同上、三二六頁。
- (29) この点については、佐藤金三郎「競争と過剰人口——エンゲルス『国民経済学批判大綱』を中心として」『経済学雑誌』
二の六参照。
- (30) マル・エン全集第一巻、五五七頁。
- (31) 同上、五六三頁。
- (32) 『資本論』（青木書店版）第一巻、五三五頁。
- (33) マル・エン全集第二巻、三六六頁。
- (34) 同上、三八二頁。

- (35) 同上、四〇二頁。
- (36) 同上、四〇九頁。
- (37) 同上、四一〇頁。
- (38) 同上、五〇六頁。傍点は引用者。
- (39) マル・エン選集補卷二、初版、五二二頁。
- (40) 『資本論』第一卷、四一九頁。
- (41) 同上、二三六頁。
- (42) 前掲『批判』、三二二頁。
- (43) 同上、三二二頁。
- (44) 同上、二六八頁。
- (45) 同上、二六五頁。
- (46) マル・エン選集補卷二、五二二頁。

あとがき

以上、『状態』の研究方法を研究過程の方法と叙述の方法に分けて検討してきた。もちろん、『状態』の方法は両者が不可分に、相互制約的に統一しているものであり、相対的に両者を区分しているにすぎない。叙述方法は研究過程の成果を直接反映する手段でありそれを前提としている。従って、『状態』の叙述方法が歴史的、実証的、分析的、下向的、帰納的、具体的であるといっても、それは相対的に特徴的にそうなのであって、なんら論理的、抽象的、上向的、演繹的でないというのではない。むしろそうした方法をもって研究されたのである。

以上のようにみてきたエンゲルスの『状態』の方法について、私は教条主義的に頭からすべて肯定するつもりは

ない。だがエンゲルスの『状態』の方法論は、私の理解しうる科学論的見地からは、基本的には妥当なものと考えられる。しかし、ここでエンゲルスの『状態』の方法をマルクス主義の『実証的歴史分析』の妥当な方法として全面的に論証する余裕はない。従ってこの課題は、別の機会まで保留しておかなければならない。ここではもっぱら、エンゲルスの『状態』の方法をそれ自体として検出することによって、エンゲルスの『状態』の方法論及び一般に労働者階級の『実証的歴史分析』の方法論についての研究になんらかの問題提起となればよいと願っている。

尚、『状態』の学的・歴史的意義や、『状態』の持つ理論的方法的限界、欠陥についても詳しくふれたかったが、なにぶん紙数に制限があったので割愛せざるをえなかった。その代りこの点について前掲拙稿でごく簡単にふれておいたので参照されたい。

今年（一九七〇年）はエンゲルス生誕一五〇周年に当る。本論は私のささやかなエンゲルス生誕一五〇周年への記念である。